

全科協

vol.48 *News*
NO.5

平成30年9月1日発行 通巻第282号

特集

ICOM京都大会2019開催まであと1年
文化の拠点としての科学系博物館の取り組み



CONTENTS

- P 2 ▶ 特集
- P10 ▶ 海外博物館事情
- P12 ▶ 9月10月の特別展等
- P14 ▶ リニューアル情報／ニューオープン情報
- P15 ▶ トピックス

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898
<http://jcs.jp>

ICOM京都大会2019開催まであと1年

文化の拠点としての科学系博物館の取り組み

ICOM京都大会2019（国際博物館会議京都大会）が1年後に開催される。大会公式ホームページ（<http://icom-kyoto-2019.org/jp/index.html>）もすでに公開されている。ICOM（International Council of Museums：国際博物館会議）は、世界の博物館の進歩発展を目指す国際的NGO（非政府組織）で、141の国や地域の約3万7千人の博物館関係者が加入している。歴史や美術のほか、自然史や科学技術、博物館学など30の国際委員会があり、近年の博物館をとりまく課題解決、人材育成、交流など、さまざまな活動を行い、3年に1度、ICOM大会を開催している。

来年9月に、日本では初めて、ICOM大会が京都で開催される。京都大会のテーマは、「文化をつなぐミュージアム—伝統を未来へ— Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition」。博物館が伝統的な文化を活かしながら、豊かな未来を創造する文化的な拠点として新たな機能を創出し、社会的な役割を果たすために何ができるか、何をすべきかを、世界各国の博物館関係者と一緒に模索する。大会期間中は、基調講演やパネルディスカッション、各分野の国際委員会セッションやオフサイトミーティングなどが行われる。主催者は、国内の多くの博物館関係者の参加を期待している。

博物館の分野は多岐にわたるが、本特集では、ICOM京都大会に関連し、科学系博物館における科学と文化との融合を図る取り組みとして、科学系博物館と他分野博物館との連携、文化施設との連携、地域社会との連携を行っている3つの事例を紹介する。事例1つ目は、自然史レガシー継承・発信実行委員会（事務局：兵庫県立人と自然の博物館）が取り組んでいる自然史系博物館連携事業である。国内各地の自然史博物館が協力し、歴史的建造物と自然史標本を融合させ、日本の自然の魅力と価値をより効果的に伝える展示について紹介する。2つ目は、神奈川県立歴史博物館と神奈川県立生命の星・地球博物館との連携事業である。「石」という共通アイテムを通して、歴史系博物館と自然史系博

物館で行った展示について紹介する。3つ目は認定NPO法人花山星空ネットワーク主催の「京都千年天文学街道ツアー」事業である。天文学者とともに京都の歴史的な建物や文化遺跡を巡るツアーについて紹介する。最後に、ICOMや京都大会の概要について紹介する。国内の多くの科学系博物館学芸員や職員にとって、国際会議は敷居が高く、参加意義なども検討しにくいのが現状である。ICOMの概要や取り組みを紹介することで、国際的な博物館情勢について知り、京都大会参加のきっかけになればと思う。

これらの科学と文化を融合した取り組み事例をとおし、分野を超えて、地域を超えて、時代を超えて、見直し、融合させることで、新たな切り口から、市民への自然科学、科学技術への興味関心の入り口をつくり、文化の拠点としての博物館の役割を探る一助になることを願う。

（編集委員 平濱 美紀子）

ICOMの国際委員会

AVICOM	オーディオビジュアル及び映像・音響新技術国際委員会
CAMOC	都市博物館のコレクション・活動国際委員会
CECA	教育・文化活動国際委員会
CIDOC	ドキュメンテーション国際委員会
CIMCIM	楽器の博物館・コレクション国際委員会
CIMUSET	科学技術の博物館・コレクション国際委員会
CIPEG	エジプト学国際委員会
COMCOL	コレクティング国際委員会
COSTUME	衣装の博物館・コレクション国際委員会
DEMIST	歴史的建築物の博物館国際委員会
GLASS	ガラスの博物館・コレクション国際委員会
ICAMT	建築・博物館技術国際委員会
ICDAD	装飾美術・デザインの博物館・コレクション国際委員会
ICEE	展示・交流国際委員会
ICFA	美術の博物館・コレクション国際委員会
ICLM	文学の博物館国際委員会
ICMAH	考古学・歴史の博物館・コレクション国際委員会
ICME	民族学の博物館・コレクション国際委員会
ICMEMO	公共に対する犯罪犠牲者追悼のための記念博物館国際委員会
ICMS	博物館セキュリティ国際委員会
ICOFOM	博物館学国際委員会
ICOM-CC	保存国際委員会
ICOMAM	武器・軍事史博物館国際委員会
ICOMON	貨幣博物館国際委員会
ICR	地方博物館国際委員会
ICTOP	人材育成国際委員会
INTERCOM	マネージメント国際委員会
MPR	マーケティング・交流国際委員会
NATHIST	自然史の博物館・コレクション国際委員会
UMAC	大学博物館・コレクション国際委員会

文化の形成を自然史標本で魅せる ～ Where culture meets nature 展 ～

兵庫県立人と自然の博物館 三橋 弘宗

はじめに

京都市東山区にある国宝・三十三間堂には、1,001体の千手観音が見事に並ぶ。もし、「どれも良く似た顔なので全部は要らないのでは」、「スペースと予算がないから3割削減したらどうか」、そんなことを発言すれば炎上するに違いない。しかし、自然史博物館が所蔵する昆虫標本の場合なら、どうだろうか。数個体だけ選別すればスペースが空く、そもそも何故そんなに多数の標本が必要なのか。そんな類の問い合わせは、公式の場で行われるものの、専門家が疑問を呈するぐらいだ。この違いは一体何に起因するのだろうか。生物学者から言わせれば、三十三間堂ほどの敷地があれば、たくさんの標本が保管できるし、維持管理コストも小さい。美しい生物標本は人気も高く、科学研究や環境保全、普及教育など用途は広く、未来を開拓する資源でもある。仏像より役立つとは言わないが、相応の価値は認めて欲しいところだ。文化財と自然史標本の違いは何なのだろうか。観光収入や法制度は理由の1つだろうが、大きな背景があるはずだ。この違いを読み解き、自然史標本を未来のレガシーとして継承し、展示を通じて共感できる発信の方法論を模索したい。

自然史標本が活きる新たな場づくり

背景にある要因は、歴史性や再入手が不可能なこと、文化や歴史的な空間の力を借りて、実物を公開していることが大きいのではないかと。1,001体の仏像を催事場で並べても、きっと人々を惹きつけはしない。つまり、周辺景観も含め、その臨場感が国や世代を問わず人々を魅了しているのではないだろうか。ちょうど、2016年にイタリア・ミラノで開催されたICOM(国際博物館会議)のメインテーマ“museums and cultural landscapes (博物館と文化的景観)”が示唆するように、単に貴重な資料だけを見せるのではなく、文化や歴史的な景観も含めた一体的な「魅せ方」が関係しているように思う。散策したミラノの町では、身近な生活空間にレガシーとなる文化的景観や文化財が至るところで溶け込み、まちかどがそのまま博物館で普段使いとなっていた。

自然史標本の場合で考えてみたい。当然ながら、自然豊かな生態系のなかで、生きた状態を観察することが最高

の「魅せ方」になる。しかし、野外観察会は臨場感ある最高の機会だが、仏像見学のように簡単ではない。そのため、多くの博物館ではジオラマに標本を配することで自然を模倣して場を演出してきたが、やはり本物には敵わない。博物館での展示は、常に次善の策で模倣的だ。

自然史標本にもっと多くの人が関心をもって、生活者の目線で標本を大切に思える人々を増やすには、標本があつてこそ理解と共感が生まれる新たな「テーマ設定」と「場づくり」の方法論がある。そこで考えたのが、自然によって育まれた文化景観や歴史的建造物を舞台とし、自然史標本を活用して文化の形成を説明すること、自然と文化が出会う場所を現代風にまちかどに再構築することだ。文化が入口なら門戸は広く生活空間とも馴染む。こうした背景から、自然科学の観点から文化の形成を解説する実験展示“Where culture meets nature”展を、京都の町家、伊丹市の酒蔵にて開催した。

Where culture meets nature展

文化と自然をテーマとした展示は各地で見られるが、歴史的建造物を利用したアウトリーチの事例は数少ない。実験的な取り組みなので、博物館ネットワークで取り組み、集合知を利用し、経験を共有することも目的とした。そのため、文部科学省委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」の一環として、兵庫県立人と自然の博物館を代表として、北海道博物館、国立科学博物館、栃木県立博物館、三重県総合博物館、大阪府立自然史博物館、橿原市昆虫館、伊丹市昆虫館、北九州市立自然史・歴史博物館で実施した。



2016年度には、京都市の重要文化財指定を受ける京町家（花洛庵・野口邸）の伝統的な建築空間にて、日本文化を育んだ自然をテーマに企画した。内容は、縦長の土間空間を利用し、生命の進化史について、古生代から順に京都周辺の化石標本を用いて紹介。居住区では、庭の植物、建具の材料となる木材、着物と絹糸、茶道具、和食の材料となる昆布などの衣食住に加え、民俗学分野の「蝸牛考」、昔話や伊藤若冲の絵画に登場する動物をとりあげた。また、町家の蔵には貴重な資料が保存されていることが多い。呉服商を営む野口家の資料から、安土桃山時代に制作された「鳥毛覆いの陣羽織」を出展してもらい、使用された鳥の種類および鳥の羽を利用した意義について、自然科学の研究成果も併せて展示した。会場は、通常非公開のため、建築や着物に関心がある方々も大勢来られた。自然史標本と町家建築は想像以上に相性が良いこと、京都の文化は自然の恵みで支えられているのだから、歴史系の博物館でも自然を扱ったほうがいい、そういった声が印象に残った。

2017年度は、日本酒発祥の地となる伊丹市において、国内最古の酒蔵となる旧岡田家住宅を舞台に、日本酒の自然誌をテーマとした。メインは、日本酒ラベルに登場する生物や鉱物を標本と併せて展示。地方色が豊かなラベルを活かし、文化と自然の多様性を表現した。見せ方も工夫し、絶滅危惧種、昆虫や鉱物の名前が付いた酒だけを集めて配置。鳥の名が付く酒はスコープを使って野鳥観察のように眺める設計とした。また、日本酒の原料となるイネとイネ科植物の系統、酒米の多様性についての展示、酒を仕込むための良質な地下水が形成される地質・地形特性、酵母や麹、発酵の仕組みなど、自然科学の視点を盛り込んだ。会場に元々あった日本酒の歴史に関する展示も活かした。

SNS等で数多くの声を頂いたが、印象的だったのは、口コミで近所の飲食店の方々が、何度もお客さんを連れてきて、勝手に解説員の役割を果たしてくれたことだ。博物館が日常に溶け込んで普段づかいになる様子を垣間見た。なお、両展示の詳細や映像は、ホームページの記録を参照頂きたい (<https://www.facebook.com/wherenature/>)。



今年度は、町家、酒蔵に続く第3弾として、寺院での展示を企画中であり、関心のある方はぜひ来場いただきたい。アウトリーチ型展示の役割を体験し、各地へと方法論を拡げたい。さらに2019年には、京都にてICOM（国際博物館会議）が開催される。文部科学省の支援を受けて、十分な準備はさせて頂いた。国際会議では、欧米の“museums and cultural landscapes”とはまた違った和の展示技法について国際発信すると同時に、“Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition（文化をつなぐミュージアム－伝統を未来に－）”を机上の空論でなく、展示空間の実体験を通じた“おもてなし”として実践し、日本らしいオリジナルな発想と体験を世界に届けたい。

岩石・石材をキーワードに地域の歴史と文化を紐解く －神奈川県立歴史博物館と神奈川県立生命の星・地球博物館による2度の共催展示と共同研究の取り組み－

神奈川県立歴史博物館 丹治 雄一

はじめに

神奈川県立歴史博物館（歴博）は、本誌の読者の方々にはあまり馴染みがない博物館かもしれないが、神奈川県立生命の星・地球博物館（地球博）とは、1967（昭和42）年に横浜・馬車道の地に開館した「神奈川県立博物館」を母体とする、言わば兄弟館の関係にある博物館である。

小稿では、筆者ら両館の学芸員による岩石・石材をテーマとした2度の共催展示と、これらの共催展示をベースに、岩石・石材を素材として自然史と歴史を地域の歴史として一体的に捉え、地域の歴史と文化に対するさらなる理解促進を目指そうとする新たな共同研究の取り組みについて紹介することとしたい。

1 「石展」の原点「白丁場石」^{しろちょうばいし}

筆者が岩石・石材をテーマとした歴博と地球博学芸員による共催展示を開催できないかと考えたきっかけは、現在歴博の建物となっている旧横浜正金銀行本店本館（1904年竣工、重要文化財・史跡）の外壁の一部に使用されている「白丁場石」という神奈川県産の石材であった（図1）。足柄下郡湯河原町で採掘された「白丁場石」は、横浜正金銀行本店以外にも日本銀行本店本館（1896年竣工、重要文化財）の外壁の一部などにも使われていることが知られており、筆者は明治・大正期に記録された「白丁場石」に関する調査報告の収集と内容分析や、丁場（石切場）跡の現地調査などを行っていた。

これらの調査で得られた知見と丁場跡で採集した岩石を地球博の山下浩之氏に示したところ、「白丁場石」は箱根火山の形成過程を研究テーマとする山下氏がこれまでに見たことのない岩石で、箱根周辺では非常に珍しい白色（薄い色味）の安山岩系岩石であることが判明し、同氏はその後、この石材の化学分析を実施して、その岩石学的特徴を明らかにした（山下浩之・笠間友博「神奈川県湯河原町に産する通称“白丁場石”の岩石学的特徴」、『神奈川県立博物館研究報告—自然科学—』第44号、2015年所収、pp.1～10）。

このような「白丁場石」をめぐる研究交流を出発点として、岩石と石材をテーマとした歴博と地球博の共催特別展の構想がスタートしたのである。

2 歴博特別展「石展」の開催

この「石展」の構想には、筆者と山下氏のほかに、歴博考古学担当の千葉毅、中世史担当の鳥居和郎、民俗学担当の新井裕美が加わり、2014（平成26）年度から本格的な準備に着手し、歴博と地球博による初めての共催特別展



図1 「石展」の原点となった神奈川県産石材「白丁場石」（岩石名：デイサイト）

「石展—かながわの歴史を彩った石の文化—」（会期：2016年2月6日～3月27日）として実現した。その構成は、「かながわの大地のなりたちと岩石」「石とかながわ」「技術が伝わる・人が伝える」「石を運ぶ・石が広がる」（図2）「くらし・信仰と石」の5章からなる。展示の核と位置づけた後半の3章は、時代・分野で区分するのではなく、あえてそれらを横断するテーマ設定とし、かながわの大地を形成する岩石を石材として利用し、旧石器時代から現代まで営まれてきた石に関わる人々の活動の通時代的な展開を示そうとした。時代・分野の異なる323件、1,000点以上におよぶ資料で、専門分野を横断した多角的な視点から石を捉えた展示であった。

3 地球博企画展「石展2」への「深化」

前記の「石展」（「石展1」）準備段階に、地球博で「石展」のリメイク版の展示を開催できることが決まり、地球博の田口公則氏が新たにメンバーに加わり企画したのが、企画展「石展2—かながわの大地が生み出した石材—」（会期：2016年12月17日～2017年2月26日）である。「かながわの石材」「石を加工する道具」「石材と関わりのある人々」「箱根ジオパーク」の4章立てで、解説パネル等を含めて297



図2 歴史系の資料だけで構成された「石展」の「白丁場石」の展示コーナー



世界に、歓びと感動を



株式会社 乃村工藝社

本社 東京都港区台場2-3-4 TEL: 03-5962-1171 (代表)

点からなる展示は、岩石や五輪塔、石工の道具など、「石展1」とできる限り同一の資料を用いつつ、その資料を自然科学の視点で再構成した展示ストーリーに落とし込むことを基本方針としたものであった。そのため、展示の名称もポスター・チラシのデザインも、田口氏の発案によりあえてふたつの展示の関連性を強調するものとした。

展示内容であるが、メインパートである「かながわの石材」では、県内各地で産出する32種類の石材を取り上げ、産出する地層や現地で採集した岩石、石材を採掘した丁場（跡）の写真や石材としての特徴、当該石材を使用した製品等を石材ごとにまとめて展示した。これにより岩石と石材が同じ展示ケース内に並ぶこととなり、展示構成の中で自然系の資料と歴史系の資料の融合が進み、自然系の資料を独立した「かながわの大地のなりたちと岩石」という1章で扱い、融合が不十分なものとどまった「石展1」の課題をクリアすることができたのである（図2・3）。これまでの博物館展示でそれほど類例が多くはない歴史系博物館と自然系博物館の学芸員による2度の共催展示を総括する



図3 各コーナーが岩石と石製品で構成された「石展2」の展示風景

と、「石展1」の課題を「石展2」で克服し、歴史系と自然系のコラボレーションの深化を一定程度達成することができたことなどから、総じて合格点をつけられるのではないかと考えている。また、専門分野の異なる学芸員との共同研究は、資料に対するさまざまな研究アプローチがあることを実感できる非常に刺激的で、楽しい体験でもあった。

4 地域の歴史と文化の理解促進にむけて

—むすびにかえて—

ここまで紹介してきた2度の共催展示として結実した共同研究の取り組みを継続・深化させたいと考えていたところ、幸いにも2018（平成30）年度より科学研究費助成事業「岩石・石材を素材とした歴史系および自然系博物館による地域学習プログラムの協働開発」（基盤研究C、研究代表者：筆者、研究分担者：山下・田口氏、研究期間：平成30～32年度）をスタートさせることができた。本研究は、岩石と石材を切り口にして、神奈川県内の各地域における大地の形成（自然史的条件）とそこで展開された人間の営み（歴史的事象）を地域の歴史として一体的に捉えた地域学習プログラムの開発を目的としたものである。「石展1」「石展2」で扱ってきた神奈川県内で暮らす人々により現在まで営まれてきた多様な石材利用は、その地域の地質構造に規定されて成り立つもので、自然史も地域の歴史と文化を構成する重要な要素として考えることができるであろう。筆者の近代の建築用石材への関心からスタートしたこの研究が、地域の歴史と文化の理解促進に資するものとなるよう、今後も兄弟館による共同研究を深めていきたい。

京都千年天文学街道

認定NPO法人花山星空ネットワーク／京都大学天文台天文普及プロジェクト室 青木 成一郎

はじめに

「京都千年天文学街道ツアー」は、認定NPO法人花山星空ネットワークが主催する天文歴史まちあるきツアーです。本天文普及活動の主な目的は、古文書の天文観測記録と現代天文学研究の繋がりを、歴史的・文化的背景と共に参加者に知ってもらうことです。本活動は、京都大学大学院理学研究科附属天文台及び京都大学総合博物館と共催、京都府及び京都市教育委員会の後援の元、寺社のご

協力により行っています。

「京都千年天文学街道」とは

「京都千年天文学街道」は、「京都千年天文学街道ツアー」^[1]と「京都千年天文学街道アストロトーク」^[2]からなります。「京都千年天文学街道ツアー」では、コース毎のテーマに基づき史跡を繋いだ天文関連史跡を約3時間のまちあるきでめぐり、古文書に記された天文観測記録と現代天文

学研究の関係や、江戸時代の暦作成について、現場へ訪れて知ることができます。「京都千年天文学街道アストロトーク」は、京都大学総合博物館で定期的に開催する座学で、通常の天文講演と立体視3D天文映像による天文講演からなります。後者は、国立天文台4次元デジタル宇宙プロジェクト提供のMitakaと京都大学天文台による独自製作の3D天文動画「Kyoto4D」を組み合わせた京都大学独自の4次元デジタル宇宙シアターです。

「京都千年天文学街道ツアー」は、京都大学名誉教授・小山勝二博士の構想「天文学街道」（図1）に基づき、総務省から情報通信技術地域人材育成・活用事業（平成22年度総務省事業）「ICTを活用した京都千年天文学街道観光整備事業」として助成を受け、コース構築やコンテンツ整備を行い開始しました^[3]。2011年4月に3コースでツアーを開始後、14コースまで増設し、現在も新たなコースを検討中です。2011年8月からは座学「京都千年天文学街道アストロトーク」も開始しました。現在までの7年強の活動で、定期開催と団体向け不定期開催も含め、ツアーは163回、アストロトークは34回開催し、のべ2,750名が参加しています。

ツアーの特徴は、①古文書の天文観測記録と現代天文学の関連等を実際に史跡へ訪れて文化的・歴史的側面を

踏まえて知ること、②歴史ガイドに加えて天文学研究を専門とする大学の先生「天文博士」（元来は中務省陰陽寮における天文観測責任者の官職名で、安倍晴明とその子孫も担った）の2名で案内すること、③関連画像や動画をiPadなどのICT機器を使って説明すること、の3点（図2）です。

コース紹介

ツアーで一番主要なコースは「明月記コース」で、藤原定家の日記「明月記」に記された客星記録と現代天文学研究の関係がテーマです。現在は、明月記に残る客星記録のうち3件（1006年、1054年（現在の「かに星雲」）、1181年）は超新星爆発と同定されており、特に1006年に現れた客星が約1000年経った超新星残骸がいは、宇宙線加速の現場として京都大学で研究対象となっています。つまり、京都を舞台として、明月記を通し、約千年前の天文観測記録と現代天文学研究が繋がっているのです。また、渋川春海による日本独自初の暦作成をテーマに、江戸時代に観測装置（圭表、渾天儀）が設置されていた台石や渋川春海作の天球儀を見学する「暦合戦コース」もあります。その他、外国人向けに「英語ツアー」（仮称）を設定し、国際研究会（IWTS2015、ICTSA2017）のエクスカージョンとして研究者向けに2回開催しました。今後、年々増加する外国人観光客向けの窓口を確保し、一般向けに開催したいと考えています。

連携について

本活動は、大学、学校、博物館、研究会、教育委員会、寺社、生涯学習施設、民間の会社等との連携の元に行っています。大学との連携は花山天文台見学を含むコースの会場提供（京都大学天文台）やアストロトーク会場の提供（京都大学総合博物館）及びコース構築や天文博士の担当等、学校との連携は課外活動としての特別ツアー開催、博物館（京都大学総合博物館）との連携は企画展示「京大日食展」（2012年4月～5月）や「明月記と最新宇宙像」（2014年9月～10月）と連動した特別ツアー開催、研究会（天文教育普及研究会、日本天文愛好者連絡会、上述の国際研究会）との連携はエクスカージョンとしてのツアー開催、京都府教育委員会とは教員研修ツアー開催や東日本大震災被災者（一般及び高校生）向けの招待ツアーの受付窓口等、寺社とは非公開寺院での史跡特別見学（梅林寺、円光寺）や宝物殿の特別見学及び会場提供（大將軍八神社）、



図1 「天文学街道」構想（画像提供は、なつたか氏）



図2 ツアーの様子。①天文博士（作花一志博士）、②歴史ガイド（坂田肇氏）、③説明補助のためにiPadを掲げるツアー担当者

生涯学習施設とは朝日カルチャーセンター協力講座としてのツアー開催、民間会社についてはツアー受付電話窓口としてのご協力（株ビューティフルツアー）や共同開催ツアー（まいまい京都）及びオリジナルデザイン星座早見盤製作（株ビクセン）などがあります。

また、他の研究者や天文教育普及活動団体との連携及び協力へ繋がるよう、天文教育普及研究会、星のソムリエシンポジウム、世界天文コミュニケーション会議2018（CAP2018）、宇宙ユニットシンポジウム等で、活動実績等を紹介・報告しています^[4]（図3）。



図3（左）CAP2018での著者の口頭発表と
（右）京都千年天文学街道オリジナルデザインの星座早見盤を掲げる著者（画像提供はともに茶木恵子氏）

ツアー参加者について

毎ツアー後に、ツアー参加前に歴史と天文学のどちらに興味があったか、在住都道府県等のアンケートをとっています。ツアー参加前の興味については、歴史が39%、天文学が54%のため、歴史に興味があって参加した方にも天文学について知ってもらふ活動となっていると言えます。また、在住地域は近畿地方が86%で多数を占めていますが、近年は新聞（全国版）での紹介等により、関東地方や中部地方からの参加者も目立ってきています。今後も全国からより多くの方に参加してもらいたいと考えています。

おわりに

「京都千年天文学街道」は、大学、学校、博物館、研究会、教育委員会、寺社、生涯学習施設、民間の会社等との連携により、7年強の活動の間に、コースを14コースへ増強して英語コースも設定し、全国の様々な地域からのべ2,750名の方に参加してもらいました。今後も、全国のより広い地域から多くの方に「京都千年天文学街道」へ参加して、古文書の天文観測記録と現代天文学の繋がり等を、天文学の文化的・歴史的側面を踏まえて知ってもらいたいと考えていますので、広報活動等へのご協力をよろしくお願い致します。なお、ご希望があれば、ツアーとアストロトークのいずれも、団体向けや研究会エクスカーション向け等ご要望に応じて開催しますので、青木（e-mail: seaokisi@gmail.com）までご相談下さい。ツアー及びアストロトークについては、公式ウェブサイト（<http://www.tenmon.org/>）をご覧ください。

文 献

- [1] 作花一志・青木成一郎, 2012,「特集：2011年度近畿支部会報告「京都千年天文学街道ツアー」」, 天文教育, Vol.24 No.22, pp.22
- [2] 作花一志・青木成一郎, 2014,「報告「アストロトーク@京大博物館」」, 天文教育, Vol.26 No.2, pp.35-36
- [3] NPO花山星空ネットワーク・京都千年天文学街道ツアー事務局, 2012,「京都千年天文学街道ツアー」, 近畿情報通信協議会 KICC Spring issue 9, pp.2-11
- [4] 青木成一郎, 2017,「古の天文観測と現代天文学研究の繋がりを学ぶツアー「京都千年天文学街道」」, 第31回天文教育普及研究会年会集録, pp.138-141

ICOM 京都大会 2019に何を求めるのか

大阪市立自然史博物館 佐久間 大輔

2019年のICOM京都大会まであと1年となった。博物館の国際会議、といってもそんなのは国立館の館長さんたちや、教授たちがきっとやっているんだろう、現場には何も関係がないのではないか、というイメージが強いかもしれない。このニュースを読む多くの博物館関係者は「博物館現場」にいるという感覚が強いだろう。

博物館現場にとって京都で行われる国際会議はどのような意味を持つのか、私見を述べてみたい。

1. 博物館の実態は現場の積み重ねでできている

有名な「イコム職業倫理規程」にしても、「自然史系博物館のためのイコム博物館倫理規定」も、現場での課題

や問題解決の積み重ねの結果として編纂されたものである。それは京都大会で議論されるという“museumの定義”なども同様である。世界の博物館の「現場の意識共有」を形成する場として、ICOMの大会は開催される。私達博物館に所属する人間が、「博物館とはどうあるべきか」を誰かの引用ではなく、自らも関わって作り上げるチャンスとして、世界大会が目の前にやってくる。この点が最も重要ではないだろうか。

学芸員同士が博物館についてアカデミックに語る場は国内には案外少ない。全科協で言えば、生物学や天文学、あるいは理科教育の学会に参加して発表や議論をすることはあっても「博物館のあり方」を博物館人同士で議論する場所は案外少ない。近年の全科協の研究発表大会はよい事例だが、議論を深める工夫がいる。こうした国内活動を高めるモデルにもなる。

ICOM大会は基調講演だけでなく、各国際委員会で多くの事例発表がある。これらは博物館現場の事例を博物館政策につなげる実践例だ。大会は事例収集、インプットの間である。国際議論を日本の博物館の実態にも即したものとするためには、この場で発表・議論参加することが必須だ。現場からの参加が必要なのである。大成功事例を求めているわけではない。皆の参考になる客観的な分析ができていない失敗、重要な挑戦の記録でいいのだ。様々な異なる条件に置かれた世界中の博物館の実践例から、多くのヒントが得られるはずだ。そしてその果実を最も活用できるのは、やはり「博物館現場」なのである。

2. グローバルなトレンド、そしてグローバル・スタンダードを自らの力にするために

博物館を取り巻く国内の制度は大きく変化しそうな状況にある。「ニューリベラリズム」、「ニューパブリックガバナンス」、「社会的包摂」、「多様性」、「SDGs」、観光の論理、ビジネスの論理などなど、これまでの博物館学の枠外にあったような様々なキーワードが博物館にも大きな影響をもたらしている。世界の博物館は何を取り入れ、ぶれない基軸に何を位置づけているのか。とびきりの多様性を持つ世界中の博物館の集まりが京都で開かれ、基調講演やセッションテーマでどのように語られ、どういった方針が提示されるのか。それらは大きく今後の博物館政策にも影響を与えるだろう。政策として打ち出されたときに、その背景にど

ICOM京都大会2019 日程(予定)

9/1 〈日〉	諮問会議 / 国内委員長・国際委員長会議
2 〈月〉	開会式 / 基調講演 / 各国際委員会のセッション / オープニング・パーティ (国立京都国際会館)
3 〈火〉	基調講演・パネルディスカッション / 各国際委員会のセッション / ソーシャルイベント (二条城)
4 〈水〉	基調講演・パネルディスカッション / 各国際委員会のセッション / ソーシャルイベント (北山エリア)
5 〈木〉	各国際委員会等のオフサイト・ミーティング / ソーシャルイベント (京都、関西周辺の博物館、文化施設、大学など) (岡崎エリア)
6 〈金〉	エクスカーション (京都市・京都市内、関西一円、遠方)
7 〈土〉	全体総会 / 諮問会議 / 閉会式・パーティ (京都国立博物館)

のような議論があったのか空気感を知る意味は大きい。各博物館の今後10年を考える、あるいはミッションや生き残り策を考える上で、こうしたグローバルなバックボーンは強い説得力を持つはずだ。

3. 博物館に関わる多様なプロフェッショナルに連なる場所として

国内にも多様な博物館があり、多様な学芸員・博物館人がいるが、国際会議に集まるのは、日本とはまた異なるプロフェッショナルたちである。背景とする専門も基礎とする法制度も違う。研究者だけではない。たとえば、欧米の大きな博物館には自然科学分野にも資料保存のプロがいる。コミュニケーションや経営のプロがいる。でも小さな博物館の中にはボランティアだけですべてを回している博物館も多い。アジアやアフリカの博物館の中には政治体制や国家制度の枠組みの中で、最善を探るスタッフがいる一方で、新興国らしい勢いのある取り組みを眼にすることも多い。

その中でどのように長い時間軸で博物館を維持するのか、資料の持つ魅力をどう語るのか、厳しい財政的事情をどう乗り切るのか、商業主義から博物館の独自性をどうやって保つのか。国内の学芸員の悩みが、日本だけのものなのか、世界ではどう位置づけられるのか。それにどう対処すべきなのか。それを見つければあなたの雑用は国際的な博物館学研究になる。スキルアップの道も見えてくる。

まだ成案を見ていないが、NATHIST(自然史委員会)でもオフサイトミーティングを含め発表の場の確保を検討している。部分参加でもより多くの博物館人が参加できる枠組みを模索していきたいと考えている。



■ 新設館

気候変動博物館が、アイルランドで開館

気候変動は多くの国で高い関心の対象になってきており、世界各地の博物館の展示で取り上げているところが多いが、気候変動を専門にした博物館の数はまだ少ない。このほどアイルランドで初めての気候変動博物館が開館した。新しい施設は、2018年2月28日に首都ダブリンの郊外の観光施設「パワーズコート・エステート」（年間46万人見学）に開館した「クール・プラネット・エキスペリエンス」だ。同館は、旧英貴族の邸宅と広大な領地をめぐって世界各地から訪れる観光客に対して、地球的規模で進んでいる気候変動とそれとともに地球の温暖化に関心をもってもらい、気候変動の進行を遅らせるために、何ができ、何をなすべきかを訴えている。同館では、展示をはじめ、イベントと教育プログラムや芝居を通じて、気候変動が起こっているしくみと、それに対処してより暮らしやすい世の中にする積極的にかつ具体的な術（すべ）を伝えている。

クール・プラネット・エキスペリエンスは、アイルランドがまだイギリスの一部だった時代につくられた英貴族の領地だったパワーズコート・エステートにあり、敷地内に保存公開されている旧英貴族の邸宅につながる使用人の居住施設に設けられている。パワーズコート・エステートは、テニスやゴルフ用品メーカーの英スラセンジャー社の創業家が所有している観光施設であるが、クール・プラネット・エキスペリエンスは、アイルランドのソフトウェア企業クロリー・カーボン（2009年創業）によって設立され、運営されている。同社は、アイルランドを拠点に、欧州の生産施設や商業施設等に省エネ技術やノウハウを提供する企業である。

Cool Planet Experience, Powerscourt Estate, Enniskerry, Wicklow County.

<https://cpe.cool/>

<https://www.youtube.com/watch?v=vvzChDPv2Ho&feature=youtu.be>

<https://www.youtube.com/watch?v=fMAnpm4Bc0k&feature=youtu.be>

<https://www.youtube.com/watch?v=ISRh3yiziic>

<https://greennews.ie/cool-planet-experience-step-climate-friendly-future/>

<https://www.youtube.com/watch?v=vZ5Z4llmcEY>

■ 企画展・特別展

カリフォルニアの野草と気候変動展が、米フラートン植物園で開催

地球的規模で進行している気候変動がカリフォルニア州の野草にどのような影響を与えているかを紹介した写真展「美と野獣：カリフォルニアの野草と気候変動」が、ロサンゼルス郊外の小都市フラートン（人口14万人）にあるフラートン植物園で開催されている。展示作品は、サンフランシスコ郊外のサウスリットに住む写真家ロジャー・バジジャーとパートナーであり写真家でもあるニータ・ウィンターによって撮影されたものだ。会期：2018年9月1日～10月28日。

カリフォルニア州内を巡回している同展は、ロサンゼルス郊外の砂漠地帯にあるサンバーナーディーノ郡博物館で立ち上がり（開催期間：2017年6月4日～10月1日）、その後サクラメントのカリフォルニア博物館、ユッカ渓谷のハイ砂漠自然史博物館、サウスリットのサンフランシスコ湾ビジター・センター、ダンビルのサンラモン渓谷博物館等で開催され、2021年に巡回が終了する。

なおフラートン植物園（1979年）には、フラートンを含むオレンジ郡一帯の農業の発展に貢献した日系人の活躍を紹介した日系人博物館が設けられている。

Beauty and the Beast: California Wildflowers and Climate Change.

Fullerton Arboretum, Fullerton, California.

<http://fullertonarboretum.org/home.php>

<https://www.dropbox.com/sh/n60ubz1h7d2hzf0/AADTXDVmwBhEY3LCBAPW-1vva?dl=0>

<http://www.winterbadger.com/home>

http://fullertonarboretum.org/museum_nikkei_current.php

ラップランドにおける気候変動展が、ヘルシンキのヴィーキ環境博物館で開催

ラップランドは、ノルウェー北部からバルト海までの沿岸地帯で、フィンランド、スウェーデン、ロシア北部を含む地方を指し、広大な亜寒帯の荒野を擁している。ラップランドは真夜中の太陽やオーロラなどの自然現象でも知られているが、地球的規模で進行している気候変動は、永久凍土の氷解、氷山の氷解、海水面の上昇、巨大氷山の沿岸への漂着等、この地域にも深刻な影響を与えている。

フィンランドの首都ヘルシンキにあるヴィーキ環境博物館（2011年開館）で、ラップランドにおける気候変動の

状況を紹介した特別展「ラップランドにおける気候変動ーわたしたちは、何ができるのか？」が、2017年9月13日から2018年8月31日まで開催された。同展では、気候変動にともなう地球の温暖化がラップランドの植物と動物にどのような影響を与えているかを写真や標本等で紹介し、また地球の温暖化の要因のひとつである二酸化炭素排出量を、個人レベルでいかに抑えるかも紹介している。

巡回展でもある「ラップランドにおける気候変動ーわたしたちは、何ができるのか？」展は、フィンランドのラップランドの中心地ロヴァニエミにあるラップランド博物館で2011年に立ち上がり、その後フィンランド各地を経て、ロシア、フランス、モロッコに巡回している。2015年にフランスで開催されたCOP21（第21回気候変動枠組条約締結国会議）の期間中に、同展はパリ市内で開催され、約4万人が訪れている。企画制作はラップランド博物館、監修は同館のフランス人学芸員Stephanie C. Lefrere。

Climate Change in Lapland. What can we do ?

Viikki Environment House. Helsinki.

<http://climatechangeinlapland.org/en/general-information/>

<http://climatechangeinlapland.org/en/cc/bogs/>

<http://climatechangeinlapland.org/en/author/>

昆虫写真家レヴォン・ビスの作品展が、スベンボー（デンマーク）の自然史博物館で開催

イギリスの昆虫写真家レヴォン・ビス（1975年生まれ）の作品展が、デンマークのスベンボーにある自然史博物館「ナチュラマ」で開催されている。出品作品は、オックスフォード大学自然史博物館で所蔵されている昆虫標本を写したもので、展示のために3メートル四方に拡大されたものだ。巡回展でもある同展は、2016年にオックスフォード大学自然史博物館で立ち上がり、スイスのバーゼル自然史博物館や、ドイツのヘッセン州立博物館（ダームスタット）や、デンマークのコペンハーゲン国立自然史博物館等で開催されてきた。会期：2018年2月6日～11月25日。

Microsculpture: The Insect Photography of Levon Biss. Naturama. Svendborg.

<http://www.naturama.dk/>

<http://microsculpture.net/exhibition.html>

<http://microsculpture.net/microsculpture.html>

<https://www.levonbissprints.com/>

豪先住民族の天測航海術展が、豪グラッドストーン博物館で開催

オーストラリア大陸の最北端のヨーク岬とパプアニューギニア島との間に、南北150km、東西200-300kmのトレス海峡があるが、この海域を舞台に古代から先住

民族は天測航海術を使って島々の間を移動してきた。このユニークな航海術を木版画で表現した作品展が、先住民族が多く住む豪クィーンズランド州グラッドストーン（人口6万人）のグラッドストーン市立博物館で開催された。作品を制作したのは、ケアンズ在住のトミー・パウで、彼自身トレス海峡諸島東部で生まれた先住民族の版画家だ。巡回展でもある同展は、2017年からクィーンズランド州各地の博物館で開催されている。会期：2018年5月26日～8月4日。

Ad Wer: Story of the Stars from Eastern Torres Strait. Gladstone Regional Art Gallery & Musuem. Gladstone, Queensland.

<http://gragm.qld.gov.au/exhibitions/ad-wer-story-of-the-stars-from-eastern-torres-strait>

<https://umbrella.org.au/author/tommy-pau-956/>

ルノー自動車の120年展が、ブリュッセルのオートワールドで開催

日産自動車を傘下におくルノーは、ルイ・ルノー（1877～1944年獄死）によって創業され、ヨーロッパ最大の自動車会社だ。その創業120周年を記念して、同社の自動車づくりの歴史を紹介した特別展が、ブリュッセルの中心部にある自動車博物館「オートワールド」で開催されている。同展では、ルノーの代表的な自動車40台の実車展示が見られる。会期：2018年7月13日～9月2日。Renault 120th Anniversary.

Autoworld. Brussels.

<http://www.autoworld.be/news-en-179-exhibition---renault-120th-anniversary--->

■ 常設展示

米エバハート自然史博物館が、鳥類の常設展示を改装

ペンシルバニア州スクラントン（人口8万人）にあるエバハート自然史博物館は、南北戦争で北軍に従軍した外科医イザイア・F・エバハート（1840-1911）の鳥類標本コレクションを母体に発展してきた博物館だ。エバハート医師は医療活動のかたわら、野鳥の剥製づくりを趣味として生涯続けたことで知られ、エバハート自然史博物館の膨大な鳥類のコレクションは、特にエバハートが剥製にしたペンシルバニア州北東部の野鳥を特色にしており、多くの渡り鳥の他に、絶滅したりヨコウバト、アメリカシロゾルやハシジロキツツキを含んでいることでも知られている。同館では3年をかけて鳥類の常設展示のリニューアルが進められてきたが、2018年9月27日より一般公開が再開される。

Everhart Museum of Natural History, Scranton.

<http://everhart-museum.org/>

<http://everhart-museum.org/history/dr-isaiah-fawkes-everhart/>

9月10月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
釧路市子ども遊学館	遊びんピック	10月6日～10月8日
牛の博物館	第26回企画展「牛飼いたちの仕事－飼養管理の昭和史－」	7月21日～10月14日
仙台市天文台	宇宙の日作文絵画コンテスト入賞者作品展	9月1日～10月28日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「日本星景写真協会「星の風景」郡山展」③	9月1日～11月25日
	鉄道の日「鉄道フェスティバル」	10月6日～10月8日
産業技術総合研究所 地質標本館	2018年度特別展 「地球の時間、ヒトの時間－アト秒から46億年まで35桁の物語－」	8月21日～11月18日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	第73回企画展「くだもの展－ギュッと濃縮！果物の魅力－」	10月6日～2019年1月27日
那須塩原市那須野が原博物館	特別展「那須野が原に農場を－華族がめざした西洋－」	9月15日～11月25日
群馬県立自然史博物館	第58回企画展「人類進化700万年」	10月6日～12月2日
群馬県立ぐんま昆虫の森	秋の野山の昆虫展（季節展）	9月1日～10月28日
千葉県科学館	「宇宙の日」記念全国小中学生作文絵画コンテスト作品展	10月18日～11月11日
我孫子市鳥の博物館	第81回企画展 我孫子の都市鳥	7月14日～11月25日
国立科学博物館	特別展「昆虫」	7月13日～10月8日
	企画展「標本づくりの技（ワザ）－職人たちが支える科博－」	9月4日～11月25日
	特別展「日本を変えた千の技術博」	10月30日～2019年3月3日
郵政博物館	「鐵－鉄道と郵便」展	9月22日～12月24日
たばこと塩の博物館	エリザベス・ハンスコレクション MOLA パナマの先住民クナ族の衣装と意匠	9月8日～10月21日
サンシャイン水族館	化ケモノ展	6月28日～11月25日
多摩六都科学館	秋の企画展「日本万華鏡大賞展～優秀作品大集合～」	10月6日～11月4日
	秋の企画展「鏡であそぼう！～ミラクルワールド～」	10月6日～11月4日
神奈川県立 生命の星・地球博物館	植物誌をつくろう！～『神奈川県植物誌2018』のできるまでとこれから～	7月14日～11月4日
糸魚川市フォッサマグナ ミュージアム	「宝石の国」展	9月8日～10月28日

開 催 館	展 覧 会 名	開 催 期 間
富山県 立山カルデラ砂防博物館	明治150年記念企画展「黎明期の常願寺川－治水と砂防－」	7月6日～10月4日
	特別展「世界の岩なだれ」	10月6日～12月23日
富山県 立山博物館	立山の明治維新 －継承、そして、創造－	9月15日～11月4日
セーレンプラネット 福井市自然史博物館分館	企画展「宇宙国体」	9月28日～10月29日
中津川市鉱物博物館	第23回企画展 「まあるい石のひみつ－球状コンクリーションはどうやってできた？」	9月22日～12月24日
ふじのくに地球環境史 ミュージアム	南アルプス～北極とヒマラヤが会える場所～	6月16日～9月24日
	第1回ミュージアム写真展	10月6日～10月28日
鳳来寺山自然科学博物館	きのこ展	9月16日～10月21日
トヨタ産業技術記念館	トヨタコレクション企画展 「100年前のオーディオ ～蓄音機が変えた音楽の愉しみ～」	9月22日～11月4日
名古屋市港防災センター	伊勢湾台風展	9月4日～11月25日
滋賀県立琵琶湖博物館	水族企画展示「琵琶湖に固有な魚たちの歴史」	7月21日～9月2日
	企画展示「化石林－ねむる太古の森－」	7月21日～11月25日
兵庫県立人と自然の博物館	ひょうご五国の自然展	10月6日～2019年1月6日
	『宮沢賢治の鳥』原画展 ―館野鴻の描く細密画と鳥の標本の世界	10月6日～2019年1月6日
姫路科学館	第54回 姫路市児童生徒科学作品展・科学工作の部	9月29日～10月21日
広島市交通科学館	平成30年度秋季企画展「つながる かいてき 高速道路」	10月12日～12月2日
徳島県立博物館	特別陳列 「ごっついで那賀川－博物館資料で見る那賀川流域の自然とくらし－」	10月13日～11月18日
愛媛県総合科学博物館	企画展「～光と鏡のサイエンスアート～魅惑の万華鏡ミュージアム」	9月22日～11月11日
北九州市立 自然史・歴史博物館	夏の特別展「へんてこモンスター～海から始まったその軌跡～」	7月14日～9月24日
	秋の特別展「食のたび－箸と和食の文化史－」	10月20日～12月9日
北九州イノベーションギャラリー	たのしい文房具の世界～机の上のイノベーション	7月14日～9月30日
	光のふしぎ展Ⅱ	10月13日～2019年1月14日
福岡県青少年科学館	平成30年度 小・中学生理科研究コンクール	10月6日～10月21日
宮崎県総合博物館	むしムシ虫展～見る・聞く・触れる昆虫のふしぎ～	7月14日～9月2日

リニューアル情報

新江ノ島水族館

[更新箇所] 新展示「カピバラ〜陽だまりの草原〜」オープン

[更新内容] 本種がくらす水辺の草原をイメージ、飼育エリアは本物の芝生を用いて池や砂場も設置しました。

[更新面積] 約80㎡

[公開日] 2018年7月14日



NEW OPEN

ニューオープン情報

館名：高知みらい科学館

高知みらい科学館は「見て、触れて、感じて、作って、学び遊ぶ」をコンセプトに、さまざまな科学体験ができる展示室、オリジナル番組を生解説で放映するプラネタリウムのほか、サイエンスショーや科学教室ができる実験室などがあります。

40数年ぶりに高知に登場したプラネタリウムは、直径12m、座席数82席と小規模ではありますが、800万個の星を放映する最新型の光学式放映機と4K相当の高解像度の映像を放映するデジタル式放映機を備えています。放映番組は高知だけでなく見られないオリジナル番組で、全編専任の解説員による生解説でお届けします。展示室は「高知の自然と生きものゾーン」、「宇宙・地球・科学体験ゾーン」、「高知の科学・ものづくりゾーン」の3つのゾーンに分かれており、高知に生息する生きものたちの標本や、コメットハンター・関勉さんなど高知にゆかりのある科学者の紹介のほか、体を動かして科学を体験できる展示アイテムを設置しています。

このほか、実験ショーで科学のふしぎを楽しめる「サイエンスショー」や、簡単な実験や工作で科学を体験できる「ミニかがく教室」も行っており、「科学にワクワク、何度もドキドキ」できる科学館です



[展示面積] 延床面積：2,258.96㎡

展示室：691.00㎡

プラネタリウム：177.65㎡

[公開日] 平成30年7月24日

[担当者] 展示製作：株式会社丹青社

プラネタリウム：株式会社五藤光学研究所

[備考] <https://otepia.kochi.jp/science/>

ここを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

Tanseisha

空間創造のプロフェッショナル 株式会社丹青社

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL 03-6455-8100 (代表) URL www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・北京・上海

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本



since 1974

地学標本／化石・鉱物・岩石
古生物／レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL 03(3354)0131 (代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

TEL 03-3350-6725 FAX 03-3350-6745

<http://www.tokyo-science.co.jp>

E-mail: info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

助 成 募 集

平成30年度 東レ理科教育賞の募集

- 対 象：東レ理科教育賞は、理科教育を人間形成の一環として位置づけた上で、中学校・高等学校レベルでの理科教育における新しい発想と工夫考案にもとづいた教育事例を対象としています。論説や提案だけではなく、教育の現場で実績のあるものを期待しています。生徒の科学に対する興味を深めるために、例えば次のような事項が考えられます。

1. 実験・観察・演示などの教材・教具の開発とその実践例
2. 効果的な実験法、器材の活用法、自発的学習をうながす工夫など
3. よりよい理科教育のための指導展開

⑩理科教育賞には、学校のクラブ活動や、博物館などの自然科学教育も含まれます。

- 応募資格：中学校・高等学校の理科教育を担当、指導、または研究する方。
(中学校・高等学校・高等専門学校・大学などの教員、指導主事、教育研究所・教育センター・博物館の所員など)

- 締 切 日：平成30年9月30日 必着

- 詳細は、東レ理科教育賞応募要領 (http://www.toray-sf.or.jp/information/science_edu.html) をご覧下さい。



平成30年度第2回理事会・総会 第26回研究発表大会 開催日決定

▶ 日 程：平成31年2月14日(木)・15日(金) ▶ 場 所：豊橋市自然史博物館

今年開館30周年を迎えた豊橋市自然史博物館にて開催いたします。日程等の詳細は12月中旬にお送りする開催通知にてご確認ください。多くの方のご参加をお待ちしております。

また、15日開催の研究発表大会での発表者の募集は10月下旬頃を予定しています。多様な事例発表の場となりますよう、皆さまの応募をお待ちしております。



パナソニックだから、可能なソリューションがある。
映像からITシステムまで、パナソニックならではの技術力と商品力。多様化する現代のビジネスニーズに、トータルソリューションでお応えします。

Core Products

- Security
- Communication
- Office
- Infrastructure
- Terminal System
- AVC Network

Total Solution

- マーケティング・セールス
- システムインテグレーション
- 設置・施工
- 保守・メンテナンスサービス
- クラウド・運用サービス

Japan

パナソニック システムソリューションズ ジャパン株式会社
詳しくはこちらのページで www.panasonic.com/jp/company/psj.html

包み込まれるような映像体験。

Media Globe Σ

「Media Globe Σ」は、最新の家庭用4Kテレビの、更に約4倍の高精細映像をお楽しみいただける、『8K』の投射解像度を持つ最新プロジェクタを搭載し、コニカミノルタの持つ先進の光学技術との融合により、高精細・高臨場感溢れる映像を、スクリーン全天に映し出します。

コニカミノルタ プラネタリウム株式会社 <http://www.konicaminolta.jp/planetarium/>



4台の天体望遠鏡



当館の屋上には三鷹光器製の天体望遠鏡4台を備えたアストロテラスがあり、日中は太陽の観測、夜間には各種天体観測会を開催しています。この望遠鏡は、青少年の美しい星空への関心が高まるよう、自然科学の教育普及に尽力された方々による多大なご寄附を活用して設置されました。

この熱い思いがこめられた望遠鏡で、本物の星空に触れていただき、これからも多くの方々に宇宙の神秘を伝えるべく、日々取組んでいます。



次回執筆者は、山口県立山口博物館 杉江 喜寿さんです。

平成30年度



海外科学系博物館視察研修

日程:平成31年1月14日(月・祝)~24日(木)(予定)

行き先:カナダ・アメリカ(オタワ、トロント、ニューヨーク等)

今年度の研修先はカナダ及びアメリカに決定いたしました。カナダ自然史博物館を始め、各都市の4施設を公式訪問する予定となっています。また、自主研修のための時間も確保されていますので、この機会をご活用下さい。

研修の募集要項は9月初旬頃郵送予定です(HPでもお知らせします)。皆さまのご参加をお待ちしております!

また、全科協ニュースvol.48No.3において、昨年度の研修報告を特集していますので、研修の様子をお知りになりたい方はぜひご覧ください。



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

大島 光春(神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員)
平田慎一郎(きしわだ自然資料館学芸員(主幹))
早武真理子(公益財団法人日本科学技術振興財団
科学技術館運営部副主任)
中井 紗織(国立研究開発法人科学技術振興機構
理数学習推進部能力伸長グループ)
畠山 泰英(株式会社キウイラボ代表取締役)
平濱美紀子(ディスカバリーパーク焼津天文担当係長)
濱田 浄人(国立科学博物館連携推進・学習センター
連携推進課長)

全科協事務局

国立科学博物館
連携推進・学習センター 連携推進課
(担当:南部・片波見・苫米地)
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898
info@jcs.jp
発行日 平成30年9月1日
発行 全国科学博物館協議会 ©
〒110-8718
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印刷 株式会社セイコー社